松村通信第９０号

2017 年 2 月 13 日
松村勝弘

開運酒造訪問とトランプ現象

奄美大島開運酒造　2 月 8 日～ 10 日にかけて、文部科学省科学研究費の調査で奄美大島開運酒造へ行ってきました。ひょんなことから社長の渡慶彦氏と知り合いになり、是非ともインタビューさせて下さいと言っていたのですが、ようやく行けました。行きつけのわがゼミ卒業生が女将をしている「万両」で京都ホテルオークラの社長福永法弘氏とたまたま一緒になり、話しているうちに渡慶彦社長とお友達だということが分かり、その後福永氏、渡氏、私の三人で「万両」で飲んでインタビューをお願いした次第です。開運酒造は会長の渡博文氏が立命館大学の先輩であることはかねて知っていましたから、話がとんとん拍子に進んだ次第です。

調査の話に戻ります。メンバーは科研メンバーの松村、大阪の滋慶医療科学大学院大学田中伸准教授、福岡大学飛田努准教授のほかに鹿児島県の地場企業に詳しい鹿児島県立短期大学の宗田健一准教授にも参加いただいての調査であった。2017/02/08 に奄美空港に到着し、泊常務のお出迎えを受け、空港から 1 時間離れた奄美市内のホテルに送っていただいてから、奄美市からさらに 1 時間離れた奄美大島宇検村にある開運酒造の工場見学を行なった。開運酒造は実は奄美観光の子会社的存在であり、ほかにも関連企業がある。今回はその中でも開運酒造の調査に限定した。今回調査して初めて分かったことであるが、開運酒造が宇検村の地域興しに力を入れられていることである。それは渡博文会長の生まれ故郷が宇検村であることから、それまで奄美市で奄美観光の経営をされていた渡会長であるが、約 20 年前の平成 8 年に戸田酒造から会社を譲り受けられ、これを奄美大島開運酒造に社名変更し、製造工場を名瀬市（現奄美市）から宇検村に新築移転されたのであった。

宇検村移転、「れんと」トップブランドに

宇検村のバックアップもあったけれど、奄美大島の中心地奄美市からわざわざ、いわば辺鄙な宇検村に移転するという決断がかえって今日の発展につながったのではないかと推察できる。障碍があることがその障碍を乗り越えるための智恵、工夫を生むことにつながったのではなかろうか。この最後発の会社が先発メーカーを追い越し、今や当社の黒糖焼酎「れんと」が黒糖焼酎のトップブランドに躍り出ているのである。

現社長や社員の反対を押し切っての移転の決断はまさに渡会長のトップダウンによるものであった。これが宇検村のバックアップや従業員の結束を生み出すことにつながり、トップブランド実現につながったのではなかろうか。渡会長曰く「思い続けると、必ずチャンスは訪れる」(『地域開発』2011 年 4 月号 28 頁)。この熱い想いが従業員に共有されて、今日にいたったわけである。

トップダウンの会長とその息子さんである社長（従業員の意見を尊重するという立場）との意見の相違は当然あったという。そのいわば対立は従業員が間に立つことによって問題解決につながったという。しかし、根っこのところでは会長の想いは全社的に共有されていたという。渡会長曰く「私たちにはビジョンがあります。これを奄美大島開運酒造の使命とし全社で徹底しています。／『宇検村』。この地に産まれ、この地に育ち、この地とともに大きく羽ばたいていくのが私たちの望みです。そこで、『宇検村』の恵みを素材に『宇検村』という美しい場所で『宇検村』が永遠に人びとにエネルギーと安らぎを与え続けられるように私たちができることを全力で行おうという考え方を基盤においているのです。これが私たちのすべての行動の礎です。」（『地域開発』前掲号 29-30 頁）

今日、「モノ」の時代から「コト」の時代へと移行している。「れんと」はあくまで「モノ」でしかない。しかしその背後にあるストーリーが消費者を引きつけることになるのではなかろうか。開運酒造のサイトに次のように書かれている。

> 「宇検村では、大自然と村の人々と過ごしくつろぐ『宇検村シマ時間体験センター』を設け、従来の観光地とは異なる視点の”おもてなし”を企画しています。
> そして私たちは、その『シマ時間』を体験できる施設を開発しました。
> 言葉や写真で語るよりも、自分の目や耳で、宇検村の心を感じてもらう。
> 奄美大島開運酒造の、もうひとつの仕事です。」
> （http://www.lento.co.jp/manage/manage4.html）

まさに、「コト」が奄美大島開運酒造の目指すところのものであることがわかる。これがうまく「モノ」である「れんと」と結びついて消費者に受け入れられるとき、当社の一層の発展に結びつくのではなかろうか。成長の余地は大きい。

酒造業界の現状とも関わって　というのも、2014 年の焼酎ブランドランキングによれば「れんと」の奄美大島開運酒造は 30 位（売上高 17 億円）であり、1 位の芋焼酎の霧島酒造の 565 億円の売上と比べるとその 3 %と比較にならない小規模である。焼酎 2 位の麦焼酎の「いいちこ」の三和酒造 482 億円も別格である。日本酒業界トップの白鶴の売上高は 350 億円（2016 年 3 月期）2 位の月桂冠は

282 億円（2015 年度）である。酒類メーカーの中でも 2 兆円規模のキリンやアサヒといったビール業界やサントリーは別格である。清酒や焼酎メーカーはそのほぼすべてが非上場企業であり、その規模も小さい。今回訪問した奄美大島開運酒造もさらに小さく、まさにファミリービジネスである。開運酒造は黒糖焼酎ではほぼ最後発であり、黒糖焼酎が奄美地域でしか製造できないという決まりがあるとは言え、それがほんの 20 年の間に黒糖焼酎のトップブランドに飛躍したという意味では注目に価する企業である。ただしアルコール飲料全体に少子高齢化の中にあって売上は低迷気味である。開運酒造も例外ではないが、最後発ながらかなり健闘しているといってよい。これが先に述べたような「コト」と結びついて、さらには黒糖焼酎の飲み方の TPO の提案とも結び付けられ、消費者に受け入れられるようになれば、一層の成長が期待できるのではなかろうか。もちろん島外での販売は 1 社のみの特約代理店を通じて行われているという制約条件もあり、消費者とのつながりを密にするためには今後解決すべき課題は多い。

トランプ現象　開運酒造調査に紙幅を取り過ぎたかもしれない。最近の社会を賑わせている話題、いわゆる「トランプ現象」についても、残りの紙幅を割いて触れておきたい。これについては、金成隆一『ルポ　トランプ王国－もう一つのアメリカを行く』岩波新書、2017 年、を紹介する中で触れてみたい。トランプが予想に反して大統領に選出されたことは驚きを持って受け止められたことは周知のところである。一体何が起こっているのだろうというわけである。本書でも紹介されているが、大統領選でのトランプの演説での次の言葉にそれは集約されている。

「グローバリゼーションのせいで、仕事や富、工場はメキシコに移ってしまいました。グローバリゼーションは金融エリートを肥やしました。」（166 頁）

アンチグローバリズム、アメリカ第一主義である。グローバリズムの結果アメリカは二極化され、ますます豊かになる「エスタブリッシュメント（既得権層）」に対する「ミドルクラスから没落する」との不安を抱く「プアーホワイト」の支持がトランプを選出したのであった。それだけではない、イギリスの「ブレグジット」単一市場から脱退＝ EU 離脱という反グローバリズムの流れ、フランスでも極右政党、国民戦線（FN）のマリーヌ・ルペン党首が選ばれる可能性がでてきたこと、ドイツその他のヨーロッパでも同様の流れがみられること、それらをもたらした「ポピュリズム」的風潮が世界的に広がっていることが、さらに不気味さを増幅させている。

しかし「高度成長期や産業化の時代を特徴づけていた予測可能な生き方が困難になり、一人ひとりが国境を越えた競争と、より大きな不確実性にさらされ、不安を抱えて生きている。……『アメリカを偉大にしよう』『かつてのように大きな夢を描こう』。有名人トランプが大声で発する単純で楽観的なメッセージは、そんな不安を抱え、ほかに頼れる存在が見当たらない人々に歓迎されたのだ。とても制御できそうに見えないグローバル化が、先進国に広がるポピュリズムの共通の背景にあるのではないだろうか。」（249 頁）日本の労働者も同じような条件に置かれていることは間違いない。グローバリズムの受益者は実はアメリカであり、そのアメリカの大企業経営者、金融資本（ウォール・ストリート）なのであった。付言すればトランプ大統領はウォール・ストリート出身者を重用してもいる。注目しておきたい。

資本主義の未来　さらに引用しよう。元世界銀行エコノミスト、ブランコ・ミラノビッチは「2016 年の著書で、富裕国のミドルクラスへの経済的締め付けはオートメーションとグローバル化によって引き起こされ、まだ終わっていないと説明した上で、次のように悲観的な将来像を示した。

『この締め付けは西側社会を２つのグループに分断するだろう。頂点にいるとても成功した富裕層と、それ以外の、ロボットが代替できない人間労働の分野で富裕層にサービスを提供する仕事に就く、圧倒的多数の人間の集まりである』

『教育は将来起きることに大きな違いを生み出さないだろう。なぜなら、多くの富裕国で量的な教育（教育期間の長さ）は上限に迫っているし、提供されうる学校教育の質でもそうであるかもしれないからだ。さらにはサービス産業の労働者は、その仕事で必要とされるレベル以上の能力や学歴を既に持っているからだ』（Global Inequality: A New Approach for the Age of Globalization, 2016）

そうであれば、先進国の将来はどうなってしまうのか。

ミラノビッチは、さらに厳しい予測をしている。この２つのグループの人々の能力差は実は小さく、そうであればこそ、富裕層に入るには、その人の家庭環境と運がこれまで以上にカギを握ることになるというのだ。裕福で教育を受けた親に恵まれた子は、親が設定してくれた『高給のいい仕事に就く』という目標に向かって幼少期から良いスタートを切る、と。」（249-250 頁）

難しい時代に突入している。今後に注目したい。

ＨＰ，ＦＢを見て下さい。又何でも意見を。

皆さんのご意見を歓迎します。HP（ http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/）もご覧下さい。**フェースブック**もやってます。また，メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい（matumura@mba.ritsumei.ac.jp）。